

## 平成18年度教育研究開発実施計画書

### 1 研究開発課題

幼・小・中等15年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で「ねばり強い」思考能力を育成する教育課程の開発

### 2 研究の概要

幼児期から青年期前期の発達に応じて、学びの根幹をなす独創的でねばり強い思考能力を育成するために、眼前の〈モノ〉についての自主的な探索と表現に始まり、時間的空間的広がりや構造のある〈コト〉についての学習習慣の獲得へ至る15年間の教育課程を開発する。具体的には①幼稚園から小学校低学年に〈モノ〉を探究する「もの好き」「もの発見」活動を導入し、②小学校高学年から中等に「もの」ロジーに加え〈コト〉を探究する「デキゴトロジー」を導入する。③生活を異にする他者からの学びあいを積極的に活用するために、異学年合同活動に加え校種間連携として「はてな？の広場」活動を導入する。④いずれの活動においても15年間一貫して「探る－観る－表す」の有機的結合を柱とし、好奇心、集中力、持続力、協同性の総合的養成を図り、幼・小・中等のカリキュラム連携を実現する。⑤長期達成過程多項目評価の導入を図り、適時性を考慮した評価を実施する。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究仮説

本研究の目的は、幼稚園3歳児から中等教育6年生までの15年間を通して事物認識とその表現の発達を促すため、前半6年間と後半9年間に分け、〈モノ〉と〈コト〉の質感や構造の探究に向けたコアとなる活動を新たなカリキュラムとして編成することである。なお、文章中、事物の総称としては〈モノ〉と〈コト〉と表記し、活動や科目等の名称としては「もの」や「デキゴト」など子どもの目線や発達に応じた表現を用いる。

課題としては、第一に、幼小接続期のカリキュラム連携を図り、包括的な学びを促す初等教育前半の教育課程を編成する。まず、幼稚園期において園児が眼前の〈モノ〉に興味を抱くことから、教師の看取りと環境構成によって〈モノ〉への旺盛な好奇心と自発的な探索活動を促し、じっくりとことん〈モノ〉を触り観て関わる習慣の形成へと導く。そして、幼稚園から小学校低学年にかけて〈モノ〉についての報告と表現活動において、教師の問いかけへの応答的活動から自主的活動への転換を促す。さらに〈モノ〉を介して他児とやりとりを形成し協同的に〈モノ〉に関わるようにする。以上を通して、集中力や持続力、表現意欲など「ねばり強い」思考能力の基礎と学びの協同性を育てる。

第二に、〈モノ〉の探究活動から、時間的にも空間的にも広がりや構造のある〈コト〉に対する知的な活動へと至る教育課程を編成する。このため小学校と中等教育学校のカリキュラム連携を重視し、小学4年生あたりでの〈モノ〉への認識や表現の変化、小学校高学年から中等教育学校にかけての〈コト〉への移行、また〈モノ〉と〈コト〉の融合活動

を視野において、教育課程を編成する。

第三に、子どもが個別に長期的に展開する自由研究活動に対して、自主性、独自性、じっくり、とことんなどの視点を入れ、評価のあり方も含めて評価方法を開発する。すなわち、それは、学びのサイクルや協同性に応じて、子どもたちの自主的でねばり強い探究を奨励し、子どもと社会にとって望ましい発達へと方向づけるための評価である。

以上の課題における仮説としては、次の4点があげられる。(図1参照)

- ① 創造的でねばり強い思考能力は、言語など表現媒体の運用能力だけでなく、探索能力、観察能力、そして表現能力に基づく。
- ② これらの能力は、周囲の世界と徹底的に関わり合う、「探る—観る—表す」というひとまとまりの活動において相互連関的に育成される。
- ③ これらの能力は、眼の前の〈モノ〉に対する活動から、時間的空間的広がり構造を有する〈コト〉に対する活動へと向かう、発達の拡張によって高められる。
- ④ 独創性は、環境に対する子どもなりの能動的で徹底的な探究活動から豊かな個別経験を得ることと、その経験を他者と共有しあうことによって育成される。

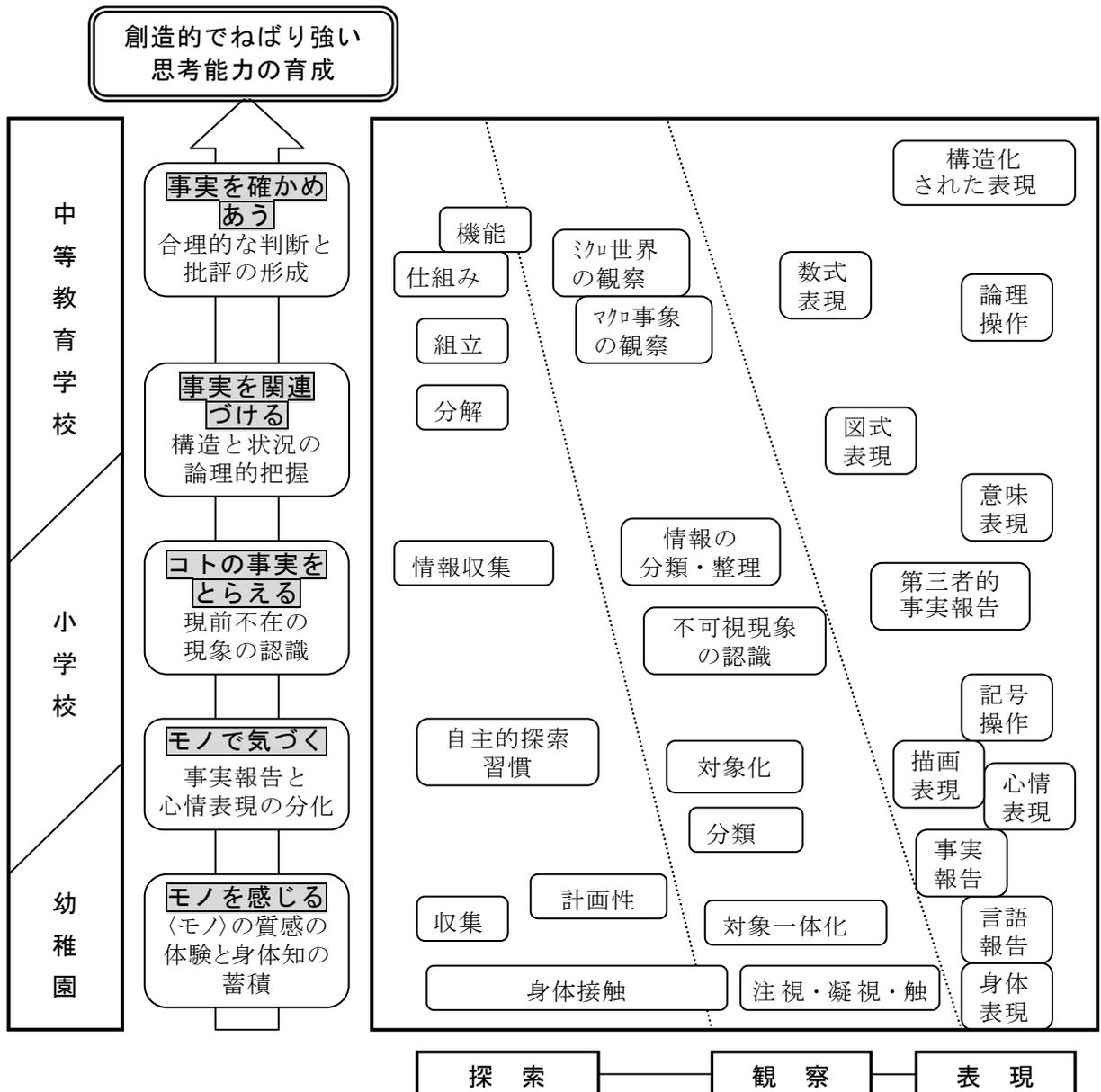


図1 15年間の事物探究活動で育つ事物認識とその表現形成(仮説)

## (2) 必要となる教育課程の特例

- ① 小学校における「新設活動の時間」（「もの好き」「もの発見」「もの」ロジャー「デキゴトロジー」、校種間連携活動「はてな？の広場」）の新設
- ② 中等教育学校における「創作科」（中学の技術・家庭科、美術科、音楽科、高校の家庭科、芸術科の統合教科）の設置

## (3) 研究成果の評価方法

多項目と複数の方法を用いて、能力評価、達成過程評価、応答性・潜在性評価、適時性評価によって研究開発の有効性を示す。

### A. 能力に表れる研究成果の評価

- ・ 小学校入学直後及び中等教育学校入学直後に、接続児童・生徒と非接続児童・生徒の2グループ間で、授業や活動への集中力、対話への参加、観察力、興味のもち方、興味に対する持続力、個別的な探究テーマの有無など、多角的に比較する。
- ・ 小学校入学時に、児童には幼稚園と小学校の違いや困難などについて、また、保護者には児童の日常生活での事物へのこだわりの有無などについて調査する。中等教育学校入学時には、生徒に、小学校と中等教育学校の違いや、自らの事物のこだわりの有無などについて、質問紙などの方法によって調査する。

### B. 達成過程に現れる研究成果の評価

- ・ 好奇心を示した事物の記録から、広がりや継続のありよう、領域など発達をよみとる。
- ・ 好奇心の発現から観察や報告に至る長期時系列記録から、活動の仕方の発達をみる。
- ・ 校種間にわたる自由研究テーマの追跡記録（活動の持続性）から、関心の変化と追究の深まりをみる。
- ・ 作品や発表、ポートフォリオに基づく評価を行う（自己評価、子ども相互の評価を含む）。

### C. 応答性・潜在性（ポテンシャル）に現れる研究成果の評価

- ・ 「たのしいね」「すごいね」から「おもしろいね」「ふしぎだね」、そして「なに」「どんなの」、さらに「それで」「だから」などの言語的相互作用と非言語的相互作用の変化を評価する。子どもの主体的な学びを促す評価活動の有効性の評価を含む。
- ・ 不確実な事態への反応（おどろきなど情動も含む）やその独自性について評価を行う。

### D. 適時性に現れる研究成果の評価

- ・ 探索範囲と探索持続力、観察持続力、表現能力について、時間的空間的広がりをふまえた評価を通して、適時性を調べるとともに、研究計画の適切さについて評価する。
- ・ 幼稚園から小学校への接続期において想定される「もの好き」から「もの発見」への移行の仕方や時期について、評価を行う。
- ・ 小学校3年生から4年生の「もの発見」から「もの」ロジャーへの移行の適時性について、〈モノ〉の構造や多様性の把握などに焦点を当て、評価を行う。
- ・ 小学校高学年から中等への接続期における「もの」ロジャーから「デキゴトロジー」

への移行の適時性について、時間的空間的に広がる出来事の因果関係や構造の把握などに焦点を当て、評価を行う。

## 4 研究計画等

### (1) 教育課程の内容等

#### A. 新領域カリキュラムの編成

##### 1) 幼稚園から小学校3年生までの「探る－観る－表す」の連結融合活動の編成

幼稚園3歳児から中等6年生までの15年間のうち、前半6年間の「探る－観る－表す」の連結融合活動(〈モノ〉と〈コト〉の探究活動)として、「もの好き」(現前の事物への好奇心と感性的体験の育成)と、「もの発見」(事物の探究対象化と事物間の関連づけ)を導入する。「もの好き」と「もの発見」のどちらとも、「ものたんけん」「ものがたり」「ものづくり」の三つの下位領域から成り、「探る－観る－表す」の連続性を重視して実施される。また、「もの好き」から「もの発見」へは子どもの育ちに応じた緩やかで柔軟な移行を試みる。(図2参照)

##### a. 幼稚園から就学移行期における「もの好き」活動の取り組み

幼稚園では、豊かな園環境(遊具、用具、教材、自然物など)を活かした自由選択活動の時間を設け、環境構成を工夫し、学級全体活動を活用しながら、〈モノ〉への主体的な探索と持続的な関わり、子ども自身の直接的な体験に基づく表現活動を促す。

- ① 「ものたんけん」として、身近な環境にある眼前の实在物との直接接触や直接観察を通して、〈モノ〉の質感を味わい〈モノ〉への興味を養うとともに身体知を蓄積する。
- ② 〈モノ〉の能動的探索経験を通して、〈モノ〉の機能や使い方に気づく。
- ③ 見通しをもって〈モノ〉と関わり、必要に応じて教師や他児などに適切な援助要請を行うとともに、因果的な関わりなど〈モノ〉との関わり方の工夫を試行する。
- ④ 「ものがたり」として、他児や教師との関わりの中で、言語報告や遊びを通して〈モノ〉の質感を他者と共有することを試みる。
- ⑤ 一対一から、一対多の対話として言語報告を行い、表現方法の拡張を試みる。
- ⑥ 言語表現においては、体験したことをことばで表現する過程を通して、知識を明確化する。5歳児から小学校低学年にかけては、〈モノ〉についての事実報告と、自分の感想や意見などの心情表現との分化をはかる。
- ⑦ 語彙力と言語運用能力の発達に先立つ表現方法として、さらには表現方法の拡張として、発達に応じた「ものづくり」を行う。様々な素材を用いた「ものづくり」によって、以前に体験した〈モノ〉の再発見と素材の再発見を行う。また、見ることと手作業の調整において集中力と持続力の伴うイメージの実現を図る。「ものづくり」過程での言語表現や相互作用を通して、新たな「ものたんけん」と「ものがたり」を可能にする。
- ⑧ 特に「ものづくり」として、他児との共通の目的や挑戦的な課題を創り出し、協力工夫して解決していく協同的な活動を行うようにする。
- ⑨ 園や学校は家庭と連携して子どもの活動を支えられるよう、保護者の理解を啓発する。

## b. 小学校低学年における「もの好き」「もの発見」活動の取り組み

「もの好き」は小学校でも引き継ぎ実施する。「もの好き」と「もの発見」は学年で分割せず、小学校低学年の適時に柔軟な移行を試みる。両者の併存や状況に応じた使い分けなど弾力的に運用を行う。「もの発見」では「もの好き」に加え下記の課題に取り組む。

- ① 園内校内から校外の近隣地区、大学や博物館などの施設、地域環境や文化財環境へと空間を拡大しながら、環境に散在する多様な自然物や人工物を自主的に探索する。
- ② 個人または少人数での充実した個別活動と、事物認識を共有し深める集団活動（発表活動など）との両面から学習を進める。
- ③ 〈モノ〉を探究の対象として捉えるとともに、〈モノ〉に探究価値をみいだす。
- ④ 子どもなりに〈モノ〉の収集、分類、関連づけを試み、長期的に持続可能な独自のテーマを設定する。
- ⑤ 〈モノ〉に対する写実的な描写と、自分なりの考えとを区別して表現する。

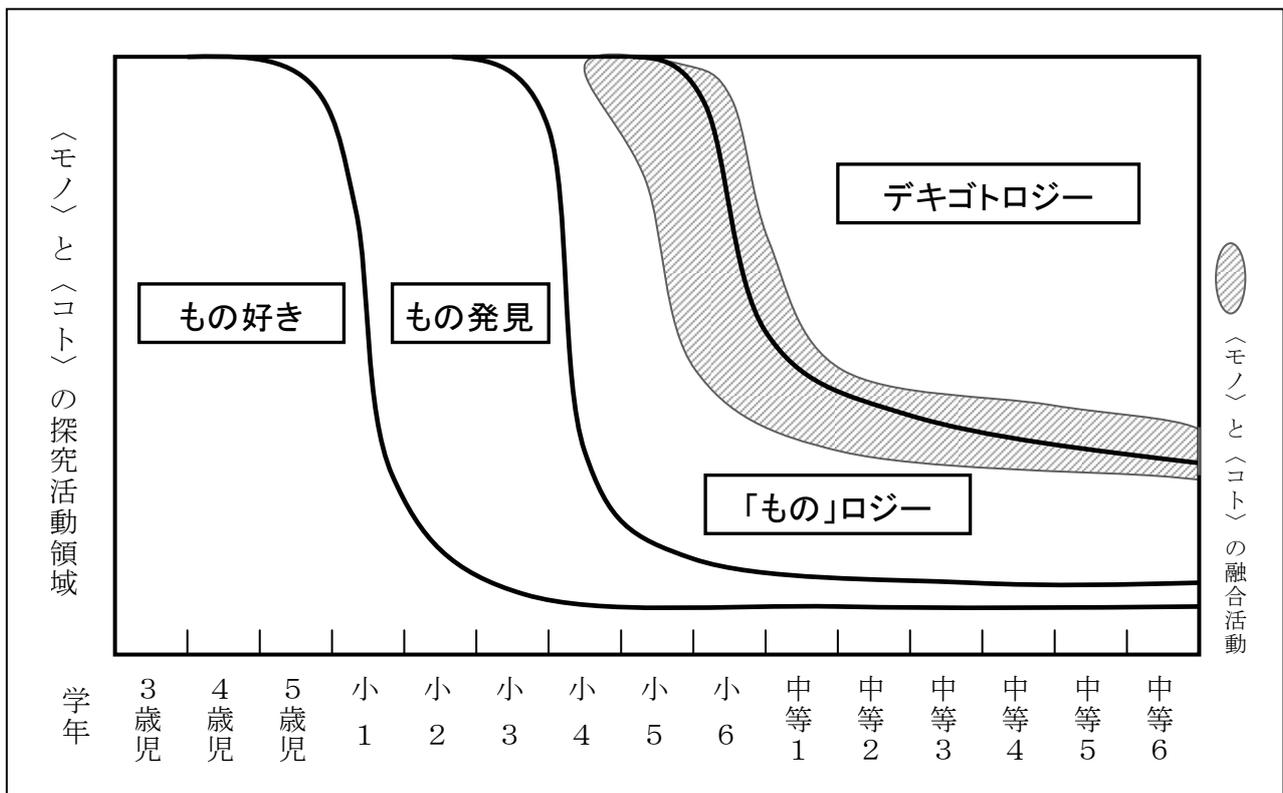


図2 〈モノ〉と〈コト〉の探究活動領域の15年間の展開

## 2) 小学4年生から中等教育6年生までの「探る—観る—表す」の連結融合活動

「もの好き」「もの発見」については、小学4年生以降、その深化発展活動である「「もの」ロジー」（「もの探検」「もの語り」「もの作り」）に柔軟に移行し、さらに「デキゴトロジー」（「デキゴト(現象)探索」「デキゴト(現象)観察」「デキゴト(現象)報告」）を導入する。現前の出来事や日常的な出来事に対する「探る—観る—表す」活動から、自然

現象や歴史的事象など時間的空間的広がりや構造を有する出来事や現象に対する「探る－観る－表す」活動へと拡張し、深化させる。また、「もの」ロジーとデキゴトロジーのいずれかには集約されない〈モノ〉と〈コト〉の融合活動についても取り組んでいく。

- ① 「デキゴトロジー」導入以前の小学3年時において、〈コト〉（出来事や現象）についての「探る－観る－表す」活動への移行の準備を図る。具体的には、例えば「自由」や「約束」や「責任」などの出来事に関わる身近な抽象概念や、自然現象への関心の振り分けがあげられる。
- ② 「デキゴト（現象）探索」として、出来事や事象に関する徹底的で多視点的な情報収集を行う。自然現象に関しては、現象を捉えるための道具立ての工夫に気づき、正確なデータを収集するための工夫を行い、バラツキや変動性などの誤差概念を理解する。
- ③ 「デキゴト（現象）観察」としては、収集した情報やデータを読み解き、分類や分析を行い、関連づけを図り、事実として記述可能なことから出来事や事象を理解する。
- ④ 「デキゴト（現象）報告」では、まず事実報告を徹底させ、自分の考えや心情記述との区別を図る。さらに、滑らかでわかりやすい表現や構造化された表現への移行を図る。
- ⑤ 「探る－観る－表す」の往還から、問題発見能力と課題解決能力を育成する。
- ⑥ 社会的な現象や出来事に関しては、立場によって「事実」の認識が異なることを理解するとともに、記述の仕方や情報提示の仕方によって「事実」は操作可能であることに気づく。例えば、ニュース報道などを活用し、世界情勢や諸外国についての「探る－観る－表す」活動に取り組み、報道と批評の区別や、両者の信頼性、適切性のあり方を学ぶ。
- ⑦ 種々の事象報告表現に関わり、報告文の読解や状況表現活動、事象表現活動、客観表現活動を重視する。
- ⑧ 自然現象や科学的な現象については、継続的な自主的テーマをもち、観察、分類、仮説構成（帰納と演繹）、予測（演繹）、検証、報告という長期間の活動を促す。
- ⑨ 学年があがるにつれて、描画や言語表現に加えて、現象の図式、数式による形式性と論理性の高い表現の導入を試みる。
- ⑩ 小学校高学年から中等教育学校にかけては、〈モノ〉から〈コト〉への拡張の過程として、町の様子など観察可能な事象から社会のしくみなど抽象度の高い事象への移行、直接観察可能な自然現象から天体や生命など不可視的な科学的現象への移行を図る。
- ⑪ 小学5～6年生あたりから、〈モノ〉事象と〈コト〉事象の融合活動に取り組む。例えば、文化財や歴史資料という〈モノ〉の追究を通して、歴史的事実という出来事の記述が可能であることを実際の活動を通して理解する。

### 3) 新設カリキュラム編成にともなう検討課題

#### a. カリキュラム編成上の留意点

「もの好き」「もの発見」「もの」ロジー「デキゴトロジー」いずれの活動においても、「探る－観る－表す」の有機的結合を促し、自発的な探索、観察の持続的緻密化、豊富な独自体験の表現を同時に促進する。

また、認識と活動の深まりについて、子ども自らふり返り、評価し、押し進めていくために、活動に関わる段階規準として、「なにコレーじっくりーとことん」（「もの好き」「も

の発見)、「きざしー熟成ーきわめ」(「もの」ロジー)、「くいつきー練りあげー達意」(「デキゴトロジー」)を導入する。これら3段階は活動への関わりのサイクルを成す。そして、ある事物と「とことん」関わったことが次の事物の「なにコレ」につながっていく、このサイクルはらせん状に高まっていく。(図3参照)

「もの好き」から「もの発見」への移行、「デキゴトロジー」の導入、〈モノ〉と〈コト〉の融合活動などは、学齢に限定して固定化せず、学級や子どもの状態、総合的学習や教科の学習など他の活動などとの関係によって、柔軟かつ弾力的に導入する。そのことによって、子どもの関心を持続させ、子どもの発達に応じた教育を提供することができる。

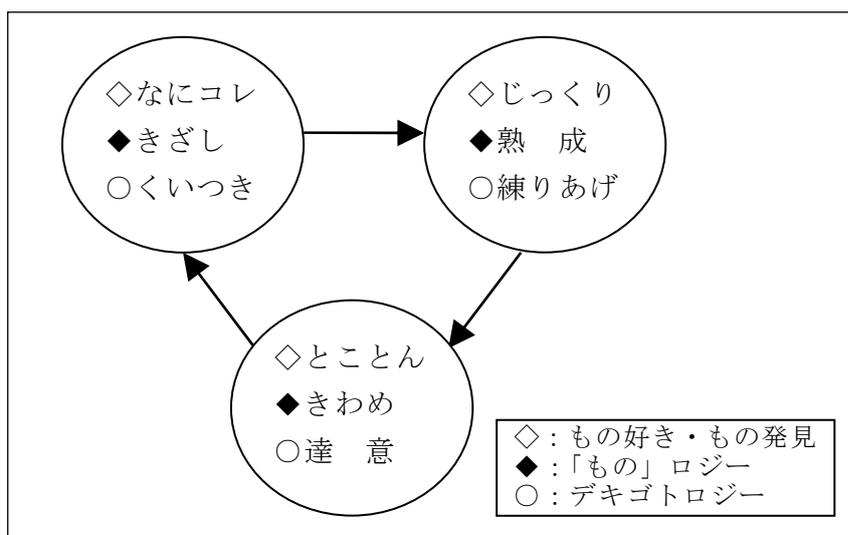


図3 活動を深化させる段階規準のサイクル

#### b. 各教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係

小学校や中等教育学校の教科を、「事物探索領域」「論理表現領域」「創造領域」の観点から見直し、新設活動との相互関係を検討し、有機的結合のあり方を明らかにする。具体的には、事物探究活動に対し、教科での学習は基礎的な認識の技法を提供する点で貢献する。事物探究活動は、教科に対し、実証的な思考の仕方や、持続的に課題に取り組む態度を導入し、自分なりのテーマをより専門的見地から学ぶために教科学習の問題に転化させて取り組めるようにする。

とりわけ、中等教育学校以降にあつては、国語や社会科のほか、生物や物理などの理科における展開を積極的に図る。また、実験し確かめ報告するという一連の活動の形成と習慣化、数学を表現学として扱う視点の形成などへの橋渡しを図る。

総合的学習との関連については、総合的学習で扱われる現代的、社会的、生活的課題の解決に向けて、事物探究活動で培われるねばり強い思考能力や実証的な活動のあり方が役立つことになる。また、総合的学習の課題が、事物探究活動に持ち込まれて、追究の深化や特化が図られる。

幼稚園の「環境」領域を中心とする5領域の見直しを通して、幼児の知的好奇心を活かした学びへの展開を促進し、幼小間の学びの接続に向けた活動構成を行う。とりわけ「環境」領域を中心に領域内の内容範囲の適切化や細分化、発達に応じた編成を検討し、幼児

の遊び経験における試行錯誤的問題解決から学びへの接続を可能にすることを図る。

### c. 環境資源の積極的活用

実施にあたっては、活動の空間的・時間的広がりを確保するために、活用可能な環境資源を開発する。

まずは、学校や園における人工物や植生など環境資源を積極的に開発し、子どもに活用可能な素材として提供する。

また、地域や大学を積極的に活用し、身近な生活環境や自然環境の資源を学習材として開発し、知的好奇心を引き出すとともに、持続的な追究を可能にさせる。

さらに、博物館や美術館、遺跡や歴史的建造物など、文化財施設を活用し、「本物」のもつ質感や歴史的価値、重厚感などを感じ取り、〈モノ〉と〈コト〉の融合から人間の生き方の真実に迫る態度を養う。

## B. 学びの協同性育成のための取り組み

事物探究活動は、子どもなりの自主的な取り組みを尊重しながらも、学びの転化と深化に向かうには、協同的な活動を必要とする。そこで本研究では、通常の活動に加え、下記のように、他者との相互作用を種々の機会ややり方で試みる活動を導入する。（本研究の全体構成については図4を参照）

### 1) 校種間連携活動「はてな？の広場」の導入

幼一小、小一中等、幼一中等の校種間連携活動として、「はてな？の広場」を設置する。生活を異にする他校種異学年の子ども同士が、自他の生活圏で〈モノ〉や〈コト〉を介した学びあい教えあいの交流を行うことにより、別の視点から事物の可能性を再発見し、事物認識を深め、新たな表現を形成することを促す。自分が探究している〈モノ〉の説明が伝わらない時に「はてな？どうしてかな」と感じるもどかしさや、相手から質問されてうまく答えられなかった時に感じる「はてな？どうして気づかなかっただろう」という反省や、相手校で初めて目にする事物を前に「はてな？なぜこれをおもしろいと思うんだろう」と感じる興味などを、「はてな？の広場」では積極的に引き出し、そこでの再発見が日常の事物探究活動に還元され、学びが深化されることを目指す。

### 2) 異学年合同活動

上記の校種間連携活動に加え、同校種内異学年・異年齢活動を導入する。「はてな？の広場」は異校種間の個人や小集団単位の交流活動であるのに対し、異学年合同活動は、通常の授業や活動のスタイルは保ちつつ、集団編成を組み替えて実施する活動であり、活動目的は参加者間で共通である。異学年合同にすることにより、発表や討論など集団でのコミュニケーション能力を高め、事物認識の深まりと共に、学び方を学ぶことを目指す。

### 3) おたずねと対話の形成

表現活動の一環として、集団での言語的コミュニケーションの形成を目指す。附属小学校では、就学移行期より、聞き手として「おたずね」という反応表現を促進する指導を行

っている。「おたずね」は、発表者や集団に対して「気になること」「わからないこと」「不安なこと」などを自由に訊くことができる言語的反応である。「おたずね」は、発表を媒介に集団で対話を形成し、その対話から学びを深化させる糸口を形成する。発表者、聞き手とも自分の考えの妥当性や、課題の共有可能性を試すことを通して、自らの気づきを明確にし、新たな課題を発見していく。また、自分のテーマやアプローチの仕方との共通点や相違点に気づき、追究の手法自体も取り入れる契機となる。本研究では、話し合いの成立を単純に目指すのではなく、学びの深化につながる対話形成のあり方を追究する。

## C. 教育課程開発を支援する取り組み

### 1) 素材／学習材開発

従来から活用されている校内・園内の遊具や用具、各種素材のほか、これまで取りあげてこなかった自然環境や人工的物質的環境の素材資源を見直し利用可能にする。また、新たに利用可能な素材を校園に持ち込むなど、資源開発を行う。こうした素材や学習材の開発によって、積極的な内容構成や環境構成を行う。子どもにとって、利用可能な素材や、季節や時宜、関心に応じた素材が増えることで、新たな興味や探究が引き出されると共に、これまで関わってきた素材との比較から、新たな気づきを産み出すことになる。

### 2) 指導法開発

子どもの自主的で独創的な活動を引き出すため、教師の指導には子どもの活動に応じた適時性、適切性が強く求められる。本研究開発では、以下の点を中心に指導のあり方を開発、検討していく。

- ・ 子どもに〈モノ〉や〈コト〉への愛着形成と持続的観察を自然に促す、環境構成と相互作用
- ・ 子どもの表現意図（気を引きたい、相手をしてほしい、驚かせたい、ほめられたい、伝えたい、教えたいなど）を理解したうえでなされる、対話することへの導き
- ・ 教師による適時の「試し」と「促し」（「何が?」「なぜ?」「だから?」「それで?」などの問いかけ）
- ・ 教師における理解者と反問者の役割の使い分け（受容的に子どもの意図や願いを理解する一方、補って理解しない、簡単に納得をみせない指導態度の形成と活用）
- ・ 「探る―観る―表す」の有機的結合を促す指導のあり方の検討
- ・ その他指導技術についての開発（教師による注目や仲介、適時の介入、方向づけ、問いかけ、子どもの興味関心の維持、など）
- ・ 保育や交流・合同活動場面における異校種間のティーム・ティーチングのあり方
- ・ 「めあて」と「ふりかえり」による自主自律的な学習への導き
- ・ 小学校における、独自学習―相互学習―独自学習の指導による自律的・探究的な学習習慣の形成

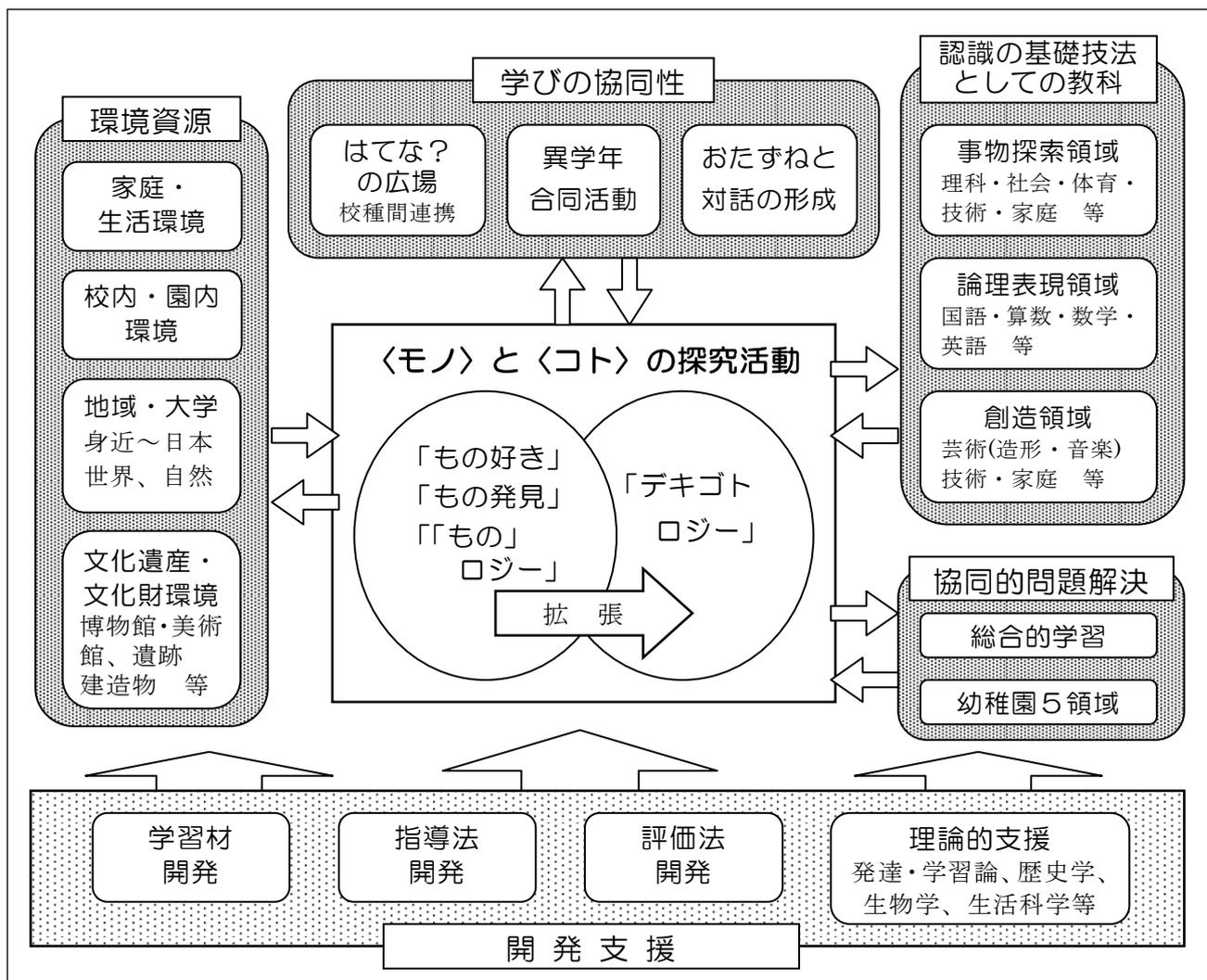


図4 事物認識とその表現形成に関わる教育課程開発の全体図

### 3) 評価法開発

子どもの事物探究活動について、子どもの短期的—長期的発達の観点からの評価と、学びや経験の質の評価に関する方法を中心に、評価法を開発を行う。

#### a. 長期にわたる発達評価

教師による評価としては、長期的な達成過程について多項目から評価を行う「長期達成過程多項目評価」を導入する。本学附属校園に入園・入学以降、活動毎の達成過程の多項目評価を蓄積し、短期には指導評価として活用すると共に、期間の区切り毎にそれぞれの子どもの活動過程をふり返り、長期間にわたる発達を評価し、カリキュラム連携の成果をフィードバックする方法を開発する。

子ども自身による評価としては、自ら活動の記録を蓄積すると共に、入園・入学時以来取り組んできた事物またはその写真や発表資料や製作物などを「足跡ボックス」に蓄積、整理し、短期的—長期的ふり返りを行うとともに、異学年異校種交流時の資料としても活用する。ポートフォリオ評価法を基盤としつつ、長期的に事物認識の深化を捉えるために

独自の評価形態を運用する。

#### **b. 事物探究活動の質をくみ取る評価次元の導入**

従来の評価法に加え、教師と子どもが、事物探究活動の質のとらえ方を共有するために、校種を超えて共用可能な新たな評価次元を導入する。

- ① 自律的な学習の次元：問題を見つける（把握）－追究方法を考える（計画）－自分なりに追究・表現する
  - ② 活動展開の次元：探索(探る)－観察(観る)－表現(表す)
  - ③ 問題解決展開の次元：収集－分類－構造化
  - ④ 活動深化の次元：なにコレ－じっくり－とことん(「もの好き」「もの発見」)、きざし－熟成－きわめ(「もの」ロジー)、くいつき－練りあげ－達意(「デキゴトロジー」)
  - ⑤ (第二次) 自律的な学習の次元：共有化されたこと－新たな課題の発見
- また、事物と自分との関係について、相互定位的關係、一方可變的關係、相互可變的關係に関する発達過程を視野に入れて行う。

#### **c. 表現方法および表現解釈の評価**

言語表現のみならず図式・数式を含めた記号表現や、スケッチや造形、演奏といった芸術表現などの表現方法を子どもはいかなる場面でどのような願いのもとに活用し、どのような効果をあげているのか、また、子どもが事物との関わりをいかなる時にどのように表現しているのか、その解釈と評価の方法を検討する。

### **4) 理論的支援**

奈良女子大学の教育システム研究開発センター及び文学部・理学部・生活環境学部・人間文化研究科等との連携により、事物探究活動の教育的発達の側面や、学習・保育環境資源の開発、素材・学習材開発などの点において、学術的理論的支援を受ける。いずれも積極的な研修として実施すると共に、必要に応じて子どもへの教育活動への関わりについても協力を得る。

## **(2) 全課程の修了認定の要件**

中等教育学校後期課程においては、74単位を修得することを修了認定の要件とする。

### (3) 年次研究計画

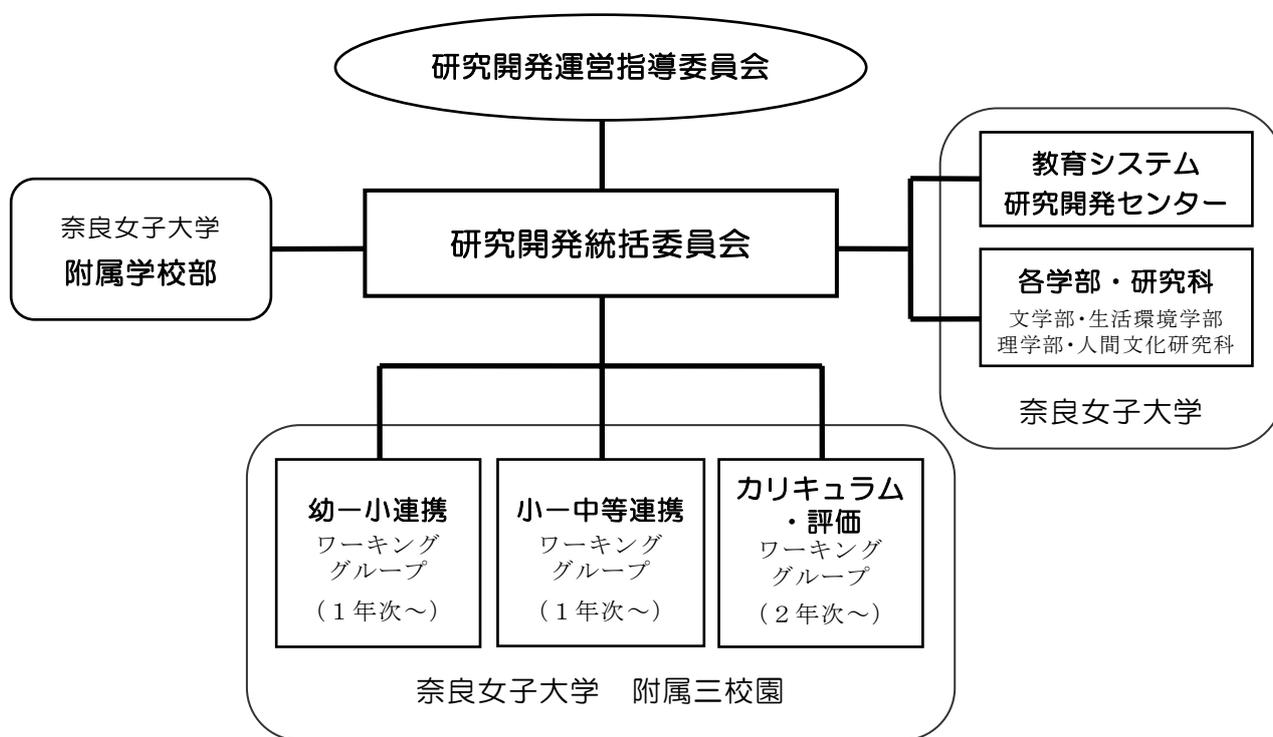
<p>第一年次</p>	<p>(1) 新領域カリキュラムの編成の試行</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼・小・中等各校園における新領域カリキュラムの編成の試行</li> <li>・ 校種間でのカリキュラムの接続性と小学3～4年生頃の移行準備の開発試行</li> <li>・ 「探る－観る－表す」の有機的結合（自発的な探索、観察の持続的緻密化、豊富な独自体験の表現の包括的促進）の開発試行</li> <li>・ 子どもの自己評価・自己促進のための活動段階規準（標語）の開発試行</li> </ul> <p>(2) 各教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係の検討</p> <p>(3) 環境資源の開発と積極的活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 素材・学習材化に向けた校園内環境資源と地域環境資源の開発試行</li> <li>・ 博物館や美術館や大学、遺跡や歴史的建造物などの文化財施設の活用</li> </ul> <p>(4) 学びの協同性育成のための取り組みの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「おたずね」の幼稚園への試行的導入と小学校での批判的再評価</li> <li>・ 小集団を単位とした、幼－小、小－中等、幼－中等の校種間連携活動「はてな？の広場」の試験的導入</li> <li>・ 小－中等間で、児童・生徒が行う「もの発見」「もの」ロジャー「デキゴトロジャー」に関する「自由研究」発表活動の試験的導入</li> </ul> <p>(5) 教育課程開発を支援する取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日常的で子どもの目線に合う素材／学習材開発</li> <li>・ 子どもの自主的で持続的な独創的活動を引き出す指導法開発</li> </ul> <p>(6) 評価法の開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 長期にわたる発達評価の導入</li> <li>・ 事物探究活動の質をくみ取る評価次元の導入</li> <li>・ 表現方法および表現解釈の評価</li> </ul> <p>(7) 定期的な三校園合同研究会開催による研究遂行のモニタリング、分析、評価</p>
<p>第二年次</p>	<p>第一年次の研究を、成果の評価に照らして修正や拡充を加え、本格化させる。すなわち、</p> <p>(1) 新領域カリキュラム編成の本格的実施</p> <p>(2) 各教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係の再構築</p> <p>(3) 環境資源の開発と積極的活用事例の蓄積と改善</p> <p>(4) 学びの協同性育成のための取り組みの本格的実施</p> <p>(5) 教育課程開発を支援する取り組みの充実</p> <p>(6) 評価法の更新</p> <p>(7) 定期的な三校園合同研究会開催による研究遂行のモニタリング、分析、評価</p>
<p>第三年次</p>	<p>上記研究計画(1)から(7)につき、第二年次を引き継ぎつつ、より進展された研究開発の確立と評価に向けた作業を行う。</p> <p>研究開発の評価と成果発表のための公開研究会を行う。</p> <p>他校での実施に向けた検討・評価、実践事例の公表、提言を行う。</p>

#### (4) 年次評価計画

<p>第一年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」をはじめとした各種の評価法による多角的な実態調査を行い、研究成果を評価するための基準を設定する。</li> <li>○ 「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録を行う。</li> <li>○ 実践事例を集積し、三校園合同研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行う。</li> <li>○ 合同公開研究会を実施し、第一年次の研究成果を公表し評価を得る。</li> <li>○ 年度末に「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録の分析を行い、1年間の研究成果の評価を行う。</li> </ul>
<p>第二年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」をはじめとした各種の評価法による多角的な調査を行い、第一年次の研究成果を評価する。</li> <li>○ 年度途中で、小学校1年生の繰り上がり繰り下がり算や認知発達心理学的なテストなどにおいて、第一年次の研究成果を評価する。</li> <li>○ 「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録を行う。(中等教育学校入学後の接続生徒の自由研究テーマや興味関心の追跡調査を行う。)</li> <li>○ 実践事例を集積し、三校園合同研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行う。</li> <li>○ 合同公開研究会を実施し、第二年次までの研究成果を公表し評価を得る。</li> <li>○ 年度末に、「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録の分析、第二年次と2年間の研究成果の評価を行う。</li> </ul>
<p>第三年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 年度当初に「能力に現れる研究成果の評価」をはじめとした各種の評価法による多角的な調査を行い、2年間の研究成果を評価する。</li> <li>○ 年度途中で、小学校1年生の繰り上がり繰り下がり算や認知発達心理学的なテストなどにおいて、第二年次の研究成果を評価する。</li> <li>○ 「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録を行う。</li> <li>○ 三校園合同研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行う。</li> <li>○ 三校園合同公開研究会を実施し、三年間の研究成果を公表し評価を得る。</li> <li>○ 年度末に、「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録の分析、第三年次を加えた3年間の研究成果の評価を行う。</li> <li>○ 3年間の「能力に現れる研究成果の評価」「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」に基づいて「適時性に現れる研究成果の評価」を行う。</li> <li>○ 3年間の総括的評価を行い、学会発表や出版などに備えて研究成果のとりまとめを行う。</li> </ul>

## 5 研究組織

### (1) 研究組織の概要



### (2) 研究担当者（研究主任の氏名には○印を付すること）

#### ①各校園研究担当者

職名	氏名	担当学年・担当教科
幼稚園長	浜田 寿美男	全体の指導
幼稚園副園長	森本 伊津子	全体の指導
幼稚園教諭	○松田 登紀	全体の指導、幼一小連携
幼稚園教諭	柿元 みはる	全体の指導、小一中等連携
幼稚園教諭	飯島 貴子	幼一小連携
小学校長	諸岡 英雄	全体の指導
小学校副校長	中谷内 政之	全体の指導
小学校教諭	○日和佐 尚	全体の指導、小一中等連携
小学校教諭	谷岡 義高	全体の指導、幼一小連携
小学校教諭	堀本 三和子	幼一小連携
小学校教諭	阪本 一英	小一中等連携
中等教育学校長	植野 洋志	全体の指導
中等教育学校副校長	吉田 信也	全体の指導
中等教育学校教諭	○荒木 由弥	全体の指導、幼一小連携
中等教育学校教諭	大内 淳也	小一中等連携
中等教育学校教諭	野上 朋子	小一中等連携

## ②研究開発統括委員会

職 名	氏 名	担 当
幼稚園教諭	○松田 登紀	幼－小連携
幼稚園教諭	柿元 みはる	小－中等連携
小学校教諭	○日和佐 尚	小－中等連携
小学校教諭	谷岡 義高	幼－小連携
中等教育学校副校長	吉田 信也	附属学校部
中等教育学校教諭	○荒木 由弥	幼－小連携
文学部教授	中島 道男	統括
文学部助教授	天ヶ瀬 正博	小－中等連携
文学部助教授	本山 方子	幼－小連携

## ③教育システム研究開発センター

職 名	氏 名	専門分野／担当
文学部助教授	天ヶ瀬 正博	認知心理学、認知学習論／小－中等連携
文学部助教授	本山 方子	教育心理学、学習文化論／幼－小連携

## (3) 運営指導委員会

### ①組織

氏 名	所 属	職 名	備考（専門分野等）
無藤 隆	白梅学園大学	学長・教授	発達心理学、幼児教育論
田中 耕治	京都大学	教授	教育方法学、評価理論
森脇 健夫	三重大学	教授	教育方法学、授業論
奈須 正裕	上智大学	教授	教育心理学、動機づけ理論
藤村 宣之	名古屋大学	助教授	教育心理学、認知発達論
(未定)	奈良県教育委員会		
(未定)	奈良市教育委員会		
(未定)	大和郡山市教育委員会		
杉峰 英憲	奈良女子大学	教授	教育方法学、カリキュラム論
麻生 武	奈良女子大学	教授	発達心理学、子どもの生活世界

### ②活動計画

カリキュラムの計画、実践および自己評価に対する指導助言

幼小合同、小中合同、三校合同研究会における外部講師としての指導助言

公開研究会支援

## 奈良女子大学附属小学校 教育課程表 (平成 18 年度)

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	総合 学習的 のな 時間	新設 活動の 時間	総 授業 時数
	国 語	社 会	算 数	理 科	生 活	音 楽	図 画 工 作	家 庭	体 育					
第 1 学年	272	/	114	/	0 (-102)	68	68	/	90	34	34	/	102 (+102)	782 (0)
第 2 学年	280	/	155	/	0 (-105)	70	70	/	90	35	35	/	105 (+105)	840 (0)
第 3 学年	200 (-35)	35 (-35)	150	70	/	60	60	/	90	35	35	70 (-35)	105 (+105)	910 (0)
第 4 学年	217 (-18)	53 (-32)	150	70 (-20)	/	60	60	/	90	35	35	70 (-35)	105 (+105)	945 (0)
第 5 学年	160 (-20)	70 (-20)	150	95	/	50	50	35 (-25)	90	35	35	70 (-40)	105 (+105)	945 (0)
第 6 学年	160 (-15)	70 (-30)	150	95	/	50	50	35 (-20)	90	35	35	70 (-40)	105 (+105)	945 (0)
計	1289 (-88)	228 (-117)	869	330 (-20)	0 (-207)	358	358	70 (-45)	540	209	209	280 (-150)	627 (+627)	5367 (0)

奈良女子大学附属中等教育学校 教育課程表 (平成18年度)

学年 時間	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	共通	共通	共通	共通	共通	共通	共通	共通	文系	理系	文系	理系
1	国語基礎 (4)	国語基礎 (4)	国語総合 (3)	国語総合(5)	現代文(2)	現代文(2)	現代文(2)	現代文(2)	現代文(2)	現代文(2)	現代文(2)	現代文(2)
2												
3												
4												
5	社会・地理 (3)	社会・歴史 (3)	現代社会 (2)	現代社会(2)	化学 I (3) 生物 I (3) 地学 I (3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 地理B(3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 地理B(3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 政治・経済(3) 倫理(3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 政治・経済(3) 倫理(3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 政治・経済(3) 倫理(3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 政治・経済(3) 倫理(3) *(3)	日本史B(3) 世界史B(3) 政治・経済(3) 倫理(3) *(3)
6												
7												
8	基礎数学 I (4)	基礎数学 II (4)	代数・幾何 I (2)	現代史(2)	日本史B(3) 世界史B(3) 地理B(3) *(3)	化学 I (3)	日本史B(3) 世界史B(3) 政治・経済(3) 倫理(3) △(0)or(3)	化学 II (4) △(0)or(4)	化学 II (4) △(0)or(4)	化学 II (4) △(0)or(4)	化学 II (4) △(0)or(4)	化学 II (4) △(0)or(4)
9												
10												
11	探究数学(1)	探究数学(1)	解析 I (3)	代数・幾何 II (3)	世界史B(3) 文化と社会(3) △(0)or(3)	物理 I (3) 生物 I (3) *(3)	化学 I (3) 生物 I (3) 地学 I (3) △0or(3)	物理 II (4) 生物 II (4) △(0)or(4)				
12												
13	基礎理科 I (3) TA	基礎理科 II (4)	自然探究 I 地球環境 (4)	理科総合 II (4)	解析 III (3) 総合数学 I (3) *(3)	代数・幾何 III (3)	総管理科(2) 総合数学 II (2) 発展現代文(2) 選択漢文(2) △(0)or(2)	◆数学特論 III (1) 数学特論 IV (1) △(0)or(1)or(2)				
14												
15	音楽(2)	音楽(2)	音楽(2) 美術(2) 生活デザイン(2) *(2)	音楽 I (2) 美術 I (2) 生活デザイン I (2) *(2)	代数・幾何 III (3) 音楽 II (2) 美術 II (2) 生活デザイン II (2) △(0)or(2)or(3)	解析 III (3)	基礎古文(2) 発展古文(2) △(0)or(2)	◆数学特論 I (2) 数学特論 II (1) △(0)or(2)or(3)				
16												
17	美術(2)	美術(2)	技術総合 家庭総合 (2)	家庭総合(2)	Reading(2) △(0)or(2)	Reading(2) △(0)or(2)	◆数学特論 I (2) 数学特論 II (1) △(0)or(2)or(3)	◆数学特論 I (2) 数学特論 II (1) △(0)or(2)or(3)	◆数学特論 I (2) 数学特論 II (1) △(0)or(2)or(3)	◆数学特論 I (2) 数学特論 II (1) △(0)or(2)or(3)	◆数学特論 I (2) 数学特論 II (1) △(0)or(2)or(3)	
18												
19	工創基礎1 生活基礎1 (3)	工創基礎2 生活基礎2 (2)	体育(3) (4講座一斉展開)	体育(2) (4講座一斉展開)	情報B(2) TA	情報B(2) TA	テーマ研究(0.5) △(0)or(1)	テーマ研究(0.5) △(0)or(1)	テーマ研究(0.5) △(0)or(1)	テーマ研究(0.5) △(0)or(1)	テーマ研究(0.5) △(0)or(1)	
20												
21	体育(3)	体育(2)	保健(1)	保健(1)	体育(3) (4講座一斉展開)	体育(3) (4講座一斉展開)	体育(3)	体育(3)	体育(3)	体育(3)	体育(3)	
22												
23	Introductory English(S) (3)	Introductory English(S) (3)	Integrated English (2)	Integrated English (3)	健康(1)	健康(1)	Topic Studies(3)	Topic Studies(3)	Topic Studies(3)	Topic Studies(3)	Topic Studies(3)	
24												
25	NET(1)	NET(1)	NET(1)	Integrated English(S)(1)	Topic Studies(3)	Topic Studies(3)	Writing(2) Reading(2) △(0)or(2)or(4)	Writing(2) Reading(2) △(0)or(2)or(4)	Writing(2) Reading(2) △(0)or(2)or(4)	Writing(2) Reading(2) △(0)or(2)or(4)	Writing(2) Reading(2) △(0)or(2)or(4)	
26												
27	Basic English(1)	Basic English(1)	Basic English(1)	NET(1)	Writing(0.5) NET(0.5) *(1)	Writing(0.5) NET(0.5) *(1)	◆代数・幾何IV(1) 代数・幾何IV特論(1) 生物 I △(0)or(1)or(2)	◆代数・幾何IV(1) 代数・幾何IV特論(1) 生物 I △(0)or(1)or(2)	◆代数・幾何IV(1) 代数・幾何IV特論(1) 生物 I △(0)or(1)or(2)	◆代数・幾何IV(1) 代数・幾何IV特論(1) 生物 I △(0)or(1)or(2)	◆代数・幾何IV(1) 代数・幾何IV特論(1) 生物 I △(0)or(1)or(2)	
28												
29	道徳(1)	道徳(1)	環境学(2)	世界学(2)	HR(1)	HR(1)	HR(1)	HR(1)	HR(1)	HR(1)	HR(1)	
30												
31	HR(1)	HR(1)	道徳(0.5)	道徳(0.5)	テーマ研究(0.5)	テーマ研究(0.5)	テーマ研究(0.5)	テーマ研究(0.5)	テーマ研究(0.5)	テーマ研究(0.5)	テーマ研究(0.5)	
32												
33	短期集中 9月・12月	総合学習 探究	総合学習 奈良	アカデミック ガイダンス	アカデミック ガイダンス							
34												

\*選択必修: 標記の科目から必ず1科目を選択する △自由選択: 選択しなくてもよいし、選択するときはその単位数になるよう標記の科目から選択する

## 学校等の概要

### 1 学校名、校長名

園名 ナ ラ ジョ シン ダイ ガク フ ソ ク ヨ ウ チ エ ン  
奈良女子大学附属幼稚園

園長名 浜田 寿美男

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 奈良県奈良市学園北1丁目16-14

電話番号 0742-45-7261

FAX番号 0742-40-2161

### 3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

3歳児		4歳児		5歳児		計	
園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数	園児数	学級数
31	2	63	2	59	2	153	6

### 4 教職員数

園長	副園長	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	教務補佐	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	6	1	3	0	1	0	1	0	14

※ 園長は奈良女子大学文学部教授(併任)

## 学校等の概要

## 1 学校名、校長名

ナ ラ ジョ シ ダイガク フ ソクシヨウガッコウ  
 学校名 奈良女子大学附属小学校  
 校長名 諸岡 英雄

## 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 奈良県奈良市百楽園1丁目7-28  
 電話番号 0742-45-4455  
 FAX番号 0742-40-2160

## 3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数										
80	2	76	2	78	2	77	2	74	2	74	2	459	12

## 4 教職員数

校長	副校長	教諭	養護教諭	非常勤講師	実習助手	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	1	14	1	9	0	1	0	2	0	29

※校長は奈良女子大学生生活環境学部教授(併任)

## 学 校 等 の 概 要

### 1 学校名、校長名

学校名 ナ ラ ジョ シ ダ イ ガ ク フ ソ ク チ ュ ウ ト ウ キ ョ ウ イ ク ガ ッ コ ウ  
 奈良女子大学附属中等教育学校  
 校長名 植野 洋志

### 2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地 奈良県奈良市東紀寺町1丁目60-1  
 電話番号 0742-26-2571  
 FAX番号 0742-20-3660

### 3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数										
全日制	普通科	122	3	123	3	123	3	120	3	122	3	115	3	725	18

### 4 教職員数

校長	副校長	教諭	養護教諭	非常勤講師	教務補佐	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計
1	2	40	2	16	4	3	1	3	0	72

※校長は奈良女子大学生生活環境学部教授(併任)

## 別紙 4 - 1

29	奈良女子大学附属幼稚園 外2校	18~20
----	-----------------	-------

## 担 当 者 名 簿

## 1 都道府県教育委員会／都道府県私立学校主管課／国立大学法人附属学校主管課

①名 称	奈良女子大学 総務・企画課		
②住 所	〒630-8506 奈良県奈良市北魚屋西町		
③連 絡 先	代表	0742-20-3204	
	直通	0742-20-3938	F A X 0742-20-3205
	E-mail midorikuma@cc.nara-wu.ac.jp		
④担 当 者	総務・企画課 附属学校係長 桑原 みどり		

## 2 研究開発学校 ※研究開発学校が複数ある場合は枝番で記入

## 2 - 1

①名 称	奈良女子大学附属幼稚園		
②住 所	〒631-0036 奈良県奈良市学園北1丁目16-14		
③連 絡 先	代表	0742-45-7261	
	F A X	0742-40-2126	
	E-mail fuyo-admin@cc.nara-wu.ac.jp		
	ホームページURL <a href="http://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/top.html">http://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/top.html</a>		
④校 長 名	浜田 寿美男		
⑤研究主任名	松田 登紀		

## 2 - 2

①名 称	奈良女子大学附属小学校
②住 所	〒631-0024 奈良県奈良市百楽園1丁目7-28
③連 絡 先	代表 0742-45-4455 F A X 0742-40-2160 E-mail fusyo-ADMIN@cc.nara-wu.ac.jp ホームページURL <a href="http://www.nara-wu.ac.jp/fusyo/Welcome-jp.html">http://www.nara-wu.ac.jp/fusyo/Welcome-jp.html</a>
④校 長 名	諸岡 英雄
⑤研究主任名	日和佐 尚

## 2 - 3

①名 称	奈良女子大学附属中等教育学校
②住 所	〒630-8305 奈良県奈良市東紀寺町1丁目1-60-1
③連 絡 先	代表 0742-26-2571 F A X 0742-20-3660 E-mail yumi@cc.nara-wu.ac.jp ホームページURL <a href="http://www.nara-wu.ac.jp/fuchuko">http://www.nara-wu.ac.jp/fuchuko</a>
④校 長 名	植野 洋志
⑤研究主任名	荒木 由弥

## 3 管理機関

①名 称	奈良女子大学 総務・企画課
②住 所	〒630-8506 奈良県奈良市北魚屋西町
③連 絡 先	代表 0742-20-3202 F A X 0742-20-3938 E-mail murotani@jimu.nara-wu.ac.jp
④担 当 者	総務・企画課長 室溪 浩